

■ 報告 ■

アメリカの大学のカリキュラム

—便覧を眺めて—

星野 勝利*

(1990年1月20日受理)

Katsutoshi Hoshino

The Curriculum of American Colleges

—A Glimpse Through Some Bulletins—

はじめに

一昨年从去年にかけてアメリカに滞在した。その間いくつかの大学を訪れる機会があった。その折には、できるだけその大学の便覧 (Bulletin/Catalogue) を手に入れるように心掛けた。後日学生に質問を受けた時など、何かの役に立つかもしれないと思ったからである。結果的に何冊かの便覧を手に入れることができたが、それらを眺めてみると、日本の大学、あるいは岩手大学との対比の上で、気になるところ、考えさせられるところもいくつかある。そこで以下、カリキュラムに関わることを中心に、特に目に触れたところに限ってレポートしてみたい。

対象とする便覧は、ブラウン大学、ペンシルヴァニア大学、デューク大学、ワシントン大学の四大学のものとする¹⁾。前三者は私立大学、ワシントン大学は州立大学である。この四つの大学を対象とする理由は、特にない。たまたまこれらの大学の便覧を手に入れる機会があったということと、これらの大学は、その名前が比較的良好に知られている、ということだけである。アメリカ全土では、四年制大学が全部で1,500くらいあるというから、そのうちわずか4つの大学の便覧を眺めてみても、アメリカの大学の全体像を知ることには、とてもならない。したがってこれは、「よしの髓から天井をのぞく」ような性格のレポートであることを、最初にお断りしておかなければならない。

*岩手大学教育学部

なおブラウン大学 (Brown University) は、ロードアイランド州プロヴィデンスの私立大学。学部学生5,561名、大学院生1,585名²⁾。1つのカレッジ (アーツ・アンド・サイエンス)、1つのスクール (大学院)、1つのプログラム (医学) からなる。ペンシルヴァニア大学 (University of Pennsylvania) は、ペンシルヴァニア州フィラデルフィアの私立大学。学部学生9,444名、大学院生12,616名。1つのカレッジ (アーツ・アンド・サイエンス) と3つのスクール (法律・ビジネス・医学) からなる。デューク大学 (Duke University) は、ノース・カロライナ州ダーラムの私立大学。学部学生5,824名、大学院生3,971名。2つのカレッジ (アーツ・アンド・サイエンスと工学) と5つのスクール (法律、ビジネス、医学など) からなる。ワシントン大学 (University of Washington) は、ワシントン州シアトルの州立大学。学部学生20,272名、大学院生8,611名。6つのカレッジ (アーツ・アンド・サイエンス、工学、建築など) と10のスクール (ビジネス、法律、医学など) からなる。なお、ブラウン大学、ペンシルヴァニア大学、デューク大学は2学期制 (semester)、ワシントン大学は4学期制 (quarter) である³⁾。

組織形態は大学により異なる。アメリカの場合カレッジは、一般にリベラル・アーツの7学 (論理・文法・修辞・幾何・算術・天文・音楽)、すなわち基礎学術領域に関わる組織であり、一方スクールは、プロフェッショナルな、応用学術領域に関わるものである。スクールの場合は学位号取得者 (postbaccalaureate) を対象とすることも多いので、ここではカレッジを主な対象とし、特に、四大学に共通するカレッジ「アーツ・アンド・サイエンス」(College of Arts and Sciences) のカリキュラムを中心に眺めることにする。

1. 卒業要件 (履修単位) について

日本の大学を卒業するために必要な最低単位数は、「大学設置基準」(32条) で定められている。一般教育科目36単位、外国語8単位、保健体育4単位、専門教育科目76単位、計124単位である。アメリカの場合、大学の基準を認定する「基準認定」(Accreditation) の機関が、全国レヴェルおよび地域レヴェルでいくつかあるようである⁴⁾。しかしその基準が具体的にどのようなものなのか、たとえば卒業要件として要求する履修単位はどの程度のものなのか、正確なところは資料不足でわからない。しかし便覧から見る限り、卒業単位の課し方、あるいは単位の数え方には、少なくとも二通りのパターンがあるようである。たとえばワシントン大学の便覧は、卒業要件としてつぎのように記している。

当大学を学位を持って卒業するためには、様々な条件を満たした上で、最低180単位 (credit) を提示しなければならない。(26ページ)

180単位という単位の数は大いに気になる。しかしこの規定そのものは、日本的な基準で一応理解できる。ところがブラウン大学の便覧を見ると、卒業資格に関わる履修規定はこれとはかなり異なる。卒業要件の基準として使われる言葉も、「単位」(credit)ではなく、「科目」(course)である。

それぞれの学生は、各学期とも通常4科目(course)、8学期で計32科目を履修すること。卒業のために取得されねばならない科目数は28であるが、これは、履修計画の不確実性と、各自の計画に柔軟性を与えることに配慮したためである。8つの学期で履修できるのは、原則として40科目まで。1つの学期に履修できるのは、最低3科目、最高5科目である。(77ページ)

この場合「科目」とは、1つ(1コマ)の授業科目を指す。したがってブラウン大学の場合、それぞれの学生は各学期4コマ平均、すなわち4年間8学期の間に、32コマの授業を受け、そのうち28クリアすれば卒業できるということになる。

デューク大学でもペンシルヴァニア大学でも、基準はやはり「科目」である。デューク大学はこれを「学期科目」(semester course)と呼び、ペンシルヴァニア大学はこれを「科目単位」(course unit)と呼んでいる。要求する科目数も、ほぼ似かよっている。デューク大学の場合は、32科目取得(ただし最低評価Dは2つまで)が条件であるが、ペンシルヴァニア大学の場合は、次のとおりである。

学生は、各学期に普通4ないし5科目を履修する。専門を満たすために履修する科目数は、専門によって異なるが、12を下回ることはない。専門のほかに各学生は、選択科目を20履修しなければならない。卒業のために必要な科目数は、専門によっても異なるが、32ないし36である。いかなる場合にも、36を越えることはない。したがって、ある専門が16科目を要求するとすれば、選択科目数はその分少なくなる。それ以上の科目を履修したいものは、履修することも可能である(そうしているものも多い)。(2ページ)

このようにみると、ワシントン大学の180単位に対し、ほかの3大学の卒業要件は、32前後の科目を取得することであることがわかる。この数字は、日本的な基準からみると、前者は多すぎるように思えるし、逆に後者は少なすぎるように思える。日本の場合180単位以上を取得する学生がいないわけではないが、その数はそう多くはないであろうし、また1学期4コマ平均で履修していたら、とても4年間で卒業することはできないだろう。だとするとこの数字の実質がどのようなものなのか気になってくるが、これは授業時間あるいは単位の数え方などに関わるものかもしれない。

2. 授業時間について

岩手大学の授業時間については『学生便覧』（平成元年度版、12ページ）に説明がある。それによると、8つの時間帯が2つつままとめて4つ（4コマ）に区分され、その1つ（1コマ）の授業時間は、「授業によっては、1時間及び3時間で行なう科目もある」という断り書きがあるが、人社部および教養課程で90分、その他の学部では100分である。そして授業は、通常週一回である。

4大学の便覧を調べてみると、なぜかそこには授業時間についてのくわしい説明が見当たらない。おそらくこれは便覧以外の資料でなされるのだと推測されるが、手持ちの他の資料をめくってみると、ブラウン大学の場合、開講予定科目を説明する『コース・アナウンスメント』（*Course Announcement* 1988-89）にくわしい説明がある。それによると、授業時間は週単位で15に区分される。すなわちそれぞれの授業は、特別な断りのない限り、月曜から金曜までの5日間（週休2日）の、15に区分された授業時間帯の、そのどれかで行なわれることになる。この時間帯はAからOまでアルファベットで区分されるが、その時間割は次の表のとおりである。

授 業 時 間 割					
	月	火	水	木	金
8:00- 8:50	A		A		A
9:00- 9:50	B	H 9:00-10:20	B	H 9:00-10:20	B
10:00-10:50	C		C		C
11:00-11:50	D	I 10:30-11:50	D	I 10:30-11:50	D
12:00-12:50	E		E		E
1:00- 1:50	F	J 1:00- 2:20	F	J 1:00- 2:20	F
2:00- 2:50	G		G		G
3:00- 3:50	M 3:00- 5:30	K 2:30- 3:50	N 3:00- 5:30	K 2:30- 3:50	O 3:00- 5:30
4:00- 4:50		教授会			
5:00- 5:50					
6:00- 6:50					
7:00- 7:50		L 6:30- 7:50		L 6:30- 7:50	

この表を見ると、ブラウン大学の授業は、1科目が週に1回とは限らないことがわかる。一つの授業の時間にも幅がある。たとえばA～Gの授業は週3回（各50分）あり、H～Lは週2回（各80分）、M～Oは週1回（各150分）である。したがって、この大学の規定（各学期4科目、4年間32科目履修）に従い1つの学期に4科目履修していくとすると、そしてその4科目が、仮にAとCとGとKに割り振られた科目であるとする、AとCとGは週3回授業があり、Kは週二回授業があるから、まとめると、全部で週11回の授業に出ることになる。ということは、週4科目履修とは言っても、出席する授業の回数からみれば、それほど暇ではないということになる。ちなみに『コース・ガイド』によると、週3回のもは学部学生を対象とした入門的な科目に多く、上級生や大学院生を対象としたセミナー的なものは、週2回ないし1回が多いようである。

なおこの表から、1つの科目に対する週当たりの時間が150分平均であることもわかる（ただしH～Lグループは $80 \times 2 = 160$ 分）。150分というこの時間は、90分ないし100分からなる岩手大学のそれに比べると、およそ1.5倍である。とすると、ブラウン大学で履修される週4科目という科目数は、時間的にみるならば、岩手大学の6科目のそれに相当することになる。

しかしブラウン大学の場合は週4科目平均の履修で4年間で卒業できるが、同じく2学期制をとる岩手大学の場合、仮に週6科目（6コマ）平均で履修しても、はたして4年間で卒業できるであろうか。現在の卒業要件からみるとおそらく難しいのではないかと思われるが、だとするとこの4大学の「単位」や「科目」の基準は、日本のそれと比べてみてどうなっているのだろうか。

3. 単位（科目）の基準について

われわれの感覚で理解しやすいのはワシントン大学の場合である。しかしこの大学の卒業必修単位は180単位である。日本の基準からみると、これはかなり多い。

しかしワシントン大学は、4学期制である。したがって、仮に夏の学期は休むにしても、残る3つの学期で単位を取得することができるから、その分単位が増える。もちろんその場合、1つの科目に対し1つの学期で与えられる単位の数が問題になるが、ところが1科目の単位数を調べてみると、意外なことに、実験関係科目（これには1単位のものもある）を除いて、ほとんどの科目が1つ3単位から5単位の単位を与えられている。

たとえば「英語」専攻関係の科目をみると、学部学生対象の専門開講科目121科目（！）のうち、113科目が1つ5単位である。またたとえば「植物」専攻の科目をみてみると、開講科目36科目のうち、17科目が5単位で、ほかに4単位、3単位のものなどが用意され

ている。なかには1科目8単位というものまである。

ということは、たとえば1つの学期に仮に5単位のもの2つと、3単位のもの2つ、計4科目を履修するとすると、その学期に取得できる単位は16単位となる。1年間(3学期)では48単位取得できることになるから、これをさらに4年間続けていくと $48 \times 4 = 192$ で、192単位取得できることになる。これは卒業要件の180単位を十分に満たす数である。すなわちワシントン大学の場合、卒業単位は180単位であるが、たとえばブラウン大学の場合と同じ様に週4コマ平均で履修したとしても、要求される180単位はおそらく十分に満たせることになるだろう、と推測される。このことは、逆に言えば、ブラウン大学などで課している32前後の科目数も、単位に換算すれば、恐らく180単位くらいになるのではないかと、ということになる。

それにしても、1つの科目に対し、1つの学期で、4単位も、5単位も与えるということは、やはり気になる。しかしこの点についてワシントン大学の便覧は、次のように説明している。

学問的単位を決定する基本的ルールは、次の通りである。すなわち1単位とは、10週間の学期の間、毎週3時間コミットするということである。つまり1単位とは、1学期全体を通して30時間コミットするということである。この場合時間とは、教室で費やされる時間も含むし、先生との個人的相談や、読書、研究、問題解決、作文、実験、練習、その他学生に求められるあらゆる活動のための時間を含むものである。(21ページ)

これによると、たとえば3単位の科目を1つ履修するということは、毎週9時間(3×3)何らかの形でその科目にコミットすることを意味する。5単位の場合には、毎週15時間(3×5)である。先の例のように、1つの学期に仮に5単位のもの2つと、3単位のもの2つ、計4科目履修するとすると、単位は16であるから、毎週コミットすべき時間は、 $3 \times 16 = 48$ で、48時間ということになる。週5日制としてこれを5で割ると、 $48 \div 5 = 9.6$ であるから、1日平均9.6時間(月曜から金曜まで)という数字がでてくる。学生としてみた場合、この学習量はかなり望ましい数字ではないかと思われるが、だとするとワシントン大学のような単位の与え方は、あるいは適正なものと言えるのかもしれない。

ちなみに岩手大学の場合、1単位で1学期にコミットすべき時間は、45時間である(『学生便覧』12ページ)。もちろんこれは「大学設置基準」(26条)に拠ったものであろうが、1学期は15週であるから、この場合1週あたりにコミットすべき時間は、1単位につき3時間となる。週あたり3時間という数字は、ワシントン大学の場合と同じである。しかしワシントン大学の場合、1学期が10週であるから、総計は30時間である。したがって、

同じ1単位でも、岩手大学の1単位は、時間的に見た場合、ワシントン大学のそれに比べるならば、1.5倍の重みがあるということになるだろう。

ということは、たとえば現在の教育学部の卒業必修単位141単位は、ワシントン大学の基準で換算すると、 $141 \times 1.5 = 211.5$ だから、211.5単位に相当するということになるだろう。逆に、ワシントン大学の180単位は、岩手大学のそれに換算すると、 $180 \div 1.5 = 120$ で、120単位ということになるだろう。

4. 履修方法、履修科目について

岩手大学の場合、卒業資格単位は、学部・学科によって差がある。獣医学科（6年制）を除くと、総単位は133～143のあいだである。そのうち教養課程科目（一般教養・外国語・保健体育）が52～55単位、専門教育科目が77～89単位である。それを「いわゆる縦割りと横割りの混合型」（『学生便覧』12ページ）で学んでいく。

ワシントン大学は、数多くのカレッジやスクールからなる。しかし学部学生の場合、卒業資格単位は一律に180単位である。その180単位のうち、学部学生全員に共通に課される最低基準として、次のような履修単位が定められている。

一般教養	30単位
作文	5単位
数量象徴思考 ⁵⁾	4単位

岩手大学で言えば、これは教養課程科目に相当するものだろう。しかしワシントン大学の場合、これは最低基準であって、カレッジやスクールあるいは専門によって、さらに追加や細かな科目指定がある。たとえば「建築・都市計画カレッジ」（College of Architecture and Urban Planning）では、学部学生に対し、専門に入る前に「作文5単位、人文科学20単位、社会科学20単位、自然科学15単位、数学科学（mathematics sciences）15単位、計75単位」（48ページ）の履修を求めている。

学部の中心となるカレッジ「アーツ・アンド・サイエンス」の場合、総単位180単位のうち専門必修単位が、それぞれの専門によっても異なるが、50～90の間に設定されている。したがって学生は、180単位から50～90を差し引いた単位、すなわち130～90単位を、特定の専門以外の単位として履修しなければならない。上記の3つの指定科目（「一般教養」「作文」「数量象徴思考」）は、当然この単位の中に含まれることになるが、便覧をみるとこのカレッジでは、この3つの基準に、さらに「作文」と「外国語」を加えている。特に「作文」は重視しているようで、「学問研究というコンテキストにおける作文力の向

上を目的とする科目を、最低10単位履修すること」(60ページ)と定めている。「外国語」の単位の規定は便覧には見当たらないが、後述する他大学の例などからみると、これは各個人によって異なる資格試験的なものと推察される。

ほかの三大学の場合は、単位制ではなく科目制である。したがって卒業要件は、単位の数ではなく、履修すべき科目の数で指定される。

ペンシルヴァニア大学の場合は、卒業に必要な履修科目数は32~36である。そのうち専門科目は12以上と定められているから(たとえば「哲学」専攻は12、「心理学」13、「化学」17)、学生はこの他に、選択として20科目前後を履修することになる。しかし何を取ってもいいわけではない。「配分要件」(Distributional Requirement)という規定があり、20科目前後の選択科目のうち、10科目は「学部学生の教育に幅を持たせるもの」(3ページ)として用意された科目の中から選ばなければならない。その10科目にはさらに指定があり、人文社会科学的性格のものが6、自然科学的性格のものが4である。

この他に外国語も履修しなければならない。しかし外国語の場合は、興味あることに、履修科目数は学生によって異なる。普通の場合は、3ないし4を履修する(3科目履修の後で行なわれる試験にパスすれば、その段階で必修としての外国語の履修は終了する)。しかし履修に入る前に、初級、中級、上級のクラス分けが行なわれ、学生によっては、1ないし2の履修で終了することもありうる。また、すでに十分な外国語の能力を持っている学生は、その証拠を示すことにより、履修をすべて免除されることもある。

これからみるとこの大学では、20前後の選択科目のうち、指定された10科目と外国語関係の科目を除いたものが、純粋な選択科目ということになる。

デューク大学の場合は、卒業要件は32科目履習である。そのうち専門に関して履修できる科目数は、上限が定められている。すなわち人文社会科学系の場合は、どのような専攻を選ぼうと、その専攻に関して履修できるのは17科目までであり、同じく自然科学系の場合は19科目までである。したがって学生は、専門以外のものとして、32から17~19を差し引いたもの、すなわち15~13科目を履修することになるが、そのうち次のようなものは指定されている。

文明史の分野……………1	専門以外のもう1つの分野……………2
文学の分野……………1	「少数学習経験」の科目……………3
経験的自然科学の分野……………1	作文……………1
専門以外の1つの分野……………4	外国語……………1または0

外国語の0は、ペンシルヴァニア大学の場合と同様で、要求水準をすでに満たしている学生は履修しなくてもよいことを意味する。(このような履修の仕方はブラウン大学でも

同じである。)「少数学習経験」(Small Group Learning Experiences)という科目は、文字どおり少数で行なわれる科目で、2年次までに最低1、3・4年次に最低2科目履修しなければならない、とある。

なおデューク大学の場合、専攻の仕方には、3つのパターンがある。1つは既存の学科のプログラムを専攻すること (Departmental Major)、もう1つは特別に用意されたプログラムを専攻すること (Program Major)、そしてもう1つは、いくつかの科にまたがるプログラムを専攻すること (Interdepartmental Major) である。学生はこのうちどれか1つの方法を選び、自分の専門を決め、それに従って履修していくことになる。専門科目として履修できるのは、先にみたように、ひとつの専門で最大限17~19までであるが、最低履修要件として8科目を指定する専門コースも多く、したがって学生は、もう1つ別の専門 (Second Major) を履修することも可能となる。

ブラウン大学の場合は、28科目履修が卒業要件である。専攻の仕方は、基本的にデューク大学のそれに似ている。しかしさらに柔軟なようで、学生はまったく自由に何らかの学習テーマを決め (どのようなテーマでもよい)、それに対応した履修計画を指導教官との相談の上でできるだけ早い時期 (遅くとも第4学期が終るまで) に作成し、大学の承認を得た上で、それに従って履修していく。これを「集中プログラム」(Concentration Program)と呼んでいるが、そのための履修科目数の上限は、20である。また、ひとつの特定の学科で取得出来る科目数にも上限があり、10を越えることはできない。なお、人文社会科学的なプログラムの場合は、指定される最低履修科目は、8~10のことが多い。したがってこのようなプログラムで学ぶ学生は、デューク大学の場合と同様に、卒業までに複数のコンセントレーションも可能となる⁶⁾。

便覧をみると、いくつかのプログラムの例が、関係指導教官の名前とともに例示してある。たとえば「生化学」(Biochemistry)に関わるものの場合には次のようになる。

A. 生物、化学、数学、物理から20 (ただし最低生物4、化学7、数学あるいは応用数学3、物理2、個別研究1~2 [生物医学または化学])

B. 人文科学あるいは社会科学から6

C. 現代外国語を読めること。高校で単位を2年間取得したものは除く。このような単位を持っていないものは、中級レベルの科目を取得すること。研究職を考えているものは、ドイツ語、ロシア語、日本語、フランス語のどれかを履修することが望ましい。

コンセントレーション指導教官：ラスク教授およびリーガー教授 (化学科)

これは自然科学系の例であるが、「生化学」を専攻したいと思う学生は、入学後出来る

だけ早い機会にこのふたりの教授と相談し、自分の長期的学習プランを立てることになる。この専攻の場合だと、A、B、Cを満たそうとすると、それだけでほとんど28になることがわかる。したがってこの専攻の場合は、二重のコンセントレーションがむずかしいことがわかるが、このような履修の仕方は、きわめて縦割りの性格の濃いものと言うべきだろう。

なおブラウン大学では、「作文」を必修として課してはいない。しかし便覧を見ると、「英語要件」(English Requirement)としてつぎのような断り書きがある。これによると、場合により「作文」が、実質必修科目として課されることがわかる。

ブラウン大学は、創立以来書くことの重要性を強調してきた。読めること、書けることは、あらゆる学位に必要である。しかしブラウン大学は、大学のすべての授業を通して、単に読み書きができるだけでなく、作文の質を向上させるように努めている。

入学してくる学生は、高校などですでに優れた作文力を示してきたと見なされている。しかし学生部長(Dean)の判断で、優れた作文力を明確に示してきたと思われない学生の場合は、最初の学期に、かなりの読書力と作文力が求められる科目を履修させられるであろう。

在学中であっても、すべての学生は、高度の作文力を発揮することが求められている。読書力あるいは作文力の水準が適切に維持されていない、と教授者によって判断された学生は、それらの能力を向上させる科目を履修するよう、学生部長によって指示される。そのような科目を満足に取得できなかった場合、そして(あるいは)学生部長が作文力が不十分と判断した場合、作文の条件が満たされるまで、履修申告は認められないであろう。(77-8 ページ)

5. 評価について

評価の仕方については、4大学に共通して1つの特徴がある。いずれの大学も、2つの評価の方法を用意しているということである。この2つとは、いわゆる優、良、可、不可といった段階的評価と、合/不合 という二分法的評価である。各大学の便覧をみると、それぞれの学生は履修する科目のうちいくつかを、どちらの方法で評価されたいかを自ら申告することができる。ただし、その申告はあらゆる科目にわたってまったく自由というわけではない。便覧を見ると、合/不合 の評価を受けられるのは、かなり限られた科目であることがわかる。ワシントン大学の場合だと、「四年間で学士号を得られる学部学生

は、最大限25単位まで」(24ページ)である。デューク大学では、「専門以外の選択科目、各学期1つまで」(50ページ)であり、しかもセミナー的なものなどは除く、とある。またペンシルヴァニア大学は、(1)外国語科目は 合/不合 でも良い、(2)専門は段階的評価でなければならない、(3)「分配要件」科目(一般教養的10科目)は段階的評価でなければならない、(4)選択20科目のうち12科目は段階的評価でなければならない、となっている。すなわち、合/不合 の二分法的評価で履修できるのは、この大学では外国語関係と選択関係の科目いくつかということになる。

したがって、評価の主流はやはり段階的評価ということになる。ではこの段階的評価とはどのようなものなのか、ということになるが、例としてペンシルヴァニア大学とワシントン大学の便覧をみると、次のようになる。

ペンシルヴァニア大学		ワシントン大学	
A+, A	4.0	A	4.0-3.9
A-	3.7	A-	3.8-3.5
B+	3.3	B+	3.4-3.2
B	3.0	B	3.1-2.9
B-	2.7	B-	2.8-2.5
C+	2.3	C+	2.4-2.2
C	2.0	C	2.1-1.9
C-	1.7	C-	1.8-1.5
D+	1.3	D+	1.4-1.2
D	1.0	D	1.1-0.9
F	0.0	D-	0.8-0.7
		E	0.0

これを見ると、評価の基本は5段階(A/B/C/D/E, A/B/C/D/F)である。それに(+)や(-)が付加されて、さらに細分化される。結果として、ペンシルヴァニア大学の場合は、実質11段階評価、ワシントン大学の場合は、12段階評価となる。そしてそれが、さらに数字にも換算される。その基準は、A=4、B=3、C=2、D=1、E(F)=0である。ワシントン大学の場合、数字換算に幅があるが、これは評価がアルファベットでなされるとは限らず、「教授者は、4.0から0.7までの評価を、0.1刻みの点数で報告することもできる」(23ページ)からである。

数字によるこの換算は、履修した科目の成績平均値を出すことも可能にする。ところがこの「成績平均値」(GPA=Grade Point Average)は、学生生活において大きな意味をもつ。ワシントン大学では、「大学で履修したすべての科目の成績平均値が2.00を越え

ていること」(26ページ)というのが、学士号取得のための全学共通の最低の基準である。そればかりでなく、専門に所属するためには、コースによっては定められた GPA があり、また専門を完了するためにも、コースによって定められた個別の GPA がある。たとえば「発話聴覚科学」(Speech and Hearing Sciences)を専攻しようとする学生は、専門に入る前に GPA 2.50 をクリアしておかなければならないし、「音楽」で専攻を完了し学士号を得るには、専門科目すべての GPA が、やはり 2.50 を越えていなければならない。

またこの4大学はすべてが、それぞれの専門(コンセントレイション)のコースの中に、成績の特に優れた学生に対する特別コース「優等生プログラム」(Honors Program)を用意している。ところがこのプログラムに乗れるかどうか、そして最終的に卒業証書に「優等生」の称号を記してもらえるかどうかは、通常この「成績平均値」が大きくものを言う。たとえばペンシルヴァニア大学の場合、便覧には、特別コースを志願するものに対して示された GPA の例示がある。アルファベット順に見ていくと、「アメリカ文明」は 3.5、「天文学」は 3.3、「生化学」3.2、「生物学」3.25、などである。ということは、たとえば「アメリカ文明」を専攻にして最終的に「優等生(オナーズ)」の称号を得ようとするれば、ペンシルヴァニア大学の換算基準では、 $A(-)=3.7$ 、 $B(+)=3.3$ であるから、ほとんどの科目で $A(-)$ は取っていないければこれは難しい、ということになる⁷⁾。

なお、学業の優れたものに与えられる栄誉としては、この「優等生」のほかに、各学部や学科で用意された様々な「賞」や「奨学金」がある。再びペンシルヴァニア大学で見ると、このようなものは、「アーツ・アンド・サイエンス」の学生全体を対象としたものだけでも全部で8つあり、その他各学科(各専攻)が所属の学生に与えるさまざまな「賞」や「奨学金」が、全部でおおよそ80くらいある。便覧にはそれら一つ一つについて解説があるが、一例として「歴史」専攻をみると、トマス・C・コ克蘭賞、リン・M・ケース賞、アドルフ・G・ローゼンガーテン賞という3つの賞が、学部学生対象に設けられている。それぞれアメリカ史、ヨーロッパ史、独創的研究の三分野に対して与えられるものである。もちろんこれらの賞は、ほとんどが奨学金付きである。

6. 学年進行、除籍規定など

このように見ると、これらの大学での学生生活は、かなりの競争生活ということになる。とすると、成績の思わしくないものに対する処置はどのようなものなのか、という点が気になってくるが、ブラウン大学の便覧は、この点に関して次のように記している。

警告、重大警告、除籍

学生は、大学で設定した卒業のための最低水準を維持しなければならない。この水準を満たさないものは除籍の対象となる。

学業成績委員会で、学業成績が不十分と判断された学生は、警告、重大警告、除籍という三つのカテゴリーの、どれかに含まれることになる。

委員会の取る措置は、すでに終了した最も近接する学期における学業成績、および（あるいは）現在に至るまでの総成績に認められる欠陥性の度合いによる。通常、学業の進行とは、連続する2つの学期で、8科目を取得することである。したがって、連続する2つの学期で6科目しか取得できないものは、「警告」を受ける。連続する2つの学期で5科目しか取得できないものは、「重大な警告」を受ける。連続する2つの学期で4科目以下しか取得できないものは、「除籍」の対象となる。連続する3つの学期にわたって「警告」あるいは「重大な警告」を受けたものも、同じく「除籍」の対象となる。（75ページ）

これが規則だとすると、単位を取らないで在学し続けるなどということは、病気その他の特殊な場合を除き、問題外となる。実際、「各学期3科目より少なく履修する場合は、文書による学生部長のしかるべき許可が必要」（77ページ）である。したがって学生は、この大学の基準に従って毎年（2学期）平均8科目、悪くても7科目づつ取得し続けて、四年間で最低28科目を満たさなければならない。これから一步でも逸れると、たちまち「警告」や「除籍」の対象となることになる。

この厳しさは、ワシントン大学でも同じようである。便覧によると学生はすべて、「最初の学期の成績平均値が2.00を下回ったものは、学業警告（academic warning）を受ける」（25ページ）のであり、その警告を受けたものは、「次の学期の終りまでに履修科目すべての成績平均値2.00を満たさないと、学業観察（academic probation）の身」（同前）となる。そして、ひとたびこの「学業観察」の立場に置かれると、次のような処置が待っている。

ひとたび「観察」の対象となった学生は、次の学期から、毎学期2.50以上の成績を連続して満たし、最終的に、総平均値を2.00に上げなければならない。これが満たせない学生は、除籍となる。（同前）

これではなかなか遊んでなどいられない、ということになるが、ちなみにドロップ・アウトの率を便覧以外の資料で調べてみると、先のブラウン大学の場合は、一年次が終るまでに3%、卒業までに15%である⁸⁾。一方ワシントン大学の場合は、この率がかかなり高く、

一年次に20%、卒業までには44%となる。すなわちこの大学の場合、卒業まで無事こぎつけるのは、入学生のうちほぼ半数の学生ということになる。

おわりに

以上が、カリキュラムに関して目に触れたところである。一種のケース・スタディのつもりで4つの便覧を眺めてみると、やはりそこにいくつかの特徴が見えてくる。1) 履修科目数が総体的に少ないこと、2) 1科目当たりの単位数が多いこと、3) 授業時間割に弾力性が見られること、4) 「作文」が重視されること、5) 評価の方法が複合的かつ多段階的であること、6) 英才教育的プログラムが重層的に用意されていること、7) 学年進行が厳しいこと、などである。これらをどう評価するかという点は本稿の目的ではないが、ここに彼我の大学の違いが感じられるのは確かである。

4つの便覧を眺めてみると、構成や内容に限らず、サイズや体裁、あるいは文体にいたるまで、実にさまざまである。読みやすく書かれたものもあれば、抽象度が高く読みとりにくいものもある。コンパクトなものもあれば、電話帳のように分厚いものもある。さながら自由と多様性の好個の見本と思われるほどである。このような便覧について、自国のそれを十分に調べてみることもせずにレポートすることは、あるいは本末転倒かも知れない。しかし本稿は、あくまで恣意的かつ感想的なものである。

注

- 1) 4つの便覧は次のとおり。*Catalogue of the University for the Years 1987-89* [ブラウン大学] *Undergraduate Academic Bulletin and Course Descriptions 1987-89* [ペンシルヴァニア大学] *Bulletin of Duke University 1987-88 (Undergraduate Instruction)* [デューク大学] *University of Washington Bulletin (General Catalogue 1986-88)* [ワシントン大学]
- 2) *Barron's Guide to the Most Prestigious Colleges* (Barron's Educational Series, Inc., 1988) による。
- 3) 2学期制のブラウン大学の場合、年間スケジュールは次のとおり。1学期(9月6日～12月20日)、2学期(1月25日～5月19日)、卒業式(5月29日)。4学期制のワシントン大学の場合は次のとおり。秋学期(9月28日～12月17日)、冬学期(1月4日～3月18日)、春学期(3月28日～6月10日)、卒業式(6月11日)、夏学期(6月22日～8月21日)。前者は各学期15週、後者は10週が基準。なおワシントン大学の夏学期は、通常の学生のほかに、臨時学生(nonmatriculated students)や高校生にも開かれたものである。新入生オリエンテーションは、いずれの大学でも、学期が始まる前に実施される。また入学式(Convocation)は、ブラウン大学の場合だと、授業開始の日の4時間目(11:00-11:50)を使って行なわれ、内容は、学長挨拶と、招待された特別講師の屋外講話である。
- 4) 「基準認定」を行なうのは民間(nongovernmental)の機関のようである。その中には、たとえば全国的なものとしては The Association of Independent Colleges and Schools

(AICS), The American Association of Bible Congress などがあり、また 地域的なものとしては Western Association of School and Colleges (WASC), Southern Association of Colleges and Schools (SACS) などがある。ちなみにブラウン大学とペンシルヴァニア大学は、ともに NEASC (New England Association of Colleges and Schools) の認定を受けており、デューク大学は SACS (Southern Association of Colleges and Schools) の、またワシントン大学は NWASC (Northwest Association of Schools and Colleges) の認定を受けている。*Lovejoy's College Guide* (Monarch Press, 1987), p. 146, p. 576, p. 673, p. 784 参照。

- 5) 数学、論理学、統計学、コンピューター科学などの学科で提供される科目。
- 6) ペンシルヴァニア大学では、「複数学位プログラム」(Dual-degree Program) が設けられている。このプログラムは、カレッジとスクールの学部学生すべてを対象としたもので(この大学の「スクール」は学部学生を受け入れる)、学生は、所属するカレッジあるいはスクール以外の科目を履修することにより、異なる学士号を同時に取得することができる。便覧はこのプログラムを、「魅力的な選択肢」(attractive option) と位置付けて、こうも述べている。「複数学位プログラムは、学生の知的地平を、深さを犠牲にすることなく拡大し、後の専門的職業や大学院での研究に対して、高度な準備の機会を与えてくれる」(74ページ)。
- 7) デューク大学の便覧は、卒業証書に記される「優等生」の称号が、「成績平均値」で3段階に分かれることを明示している。すなわち平均値 3.3 で「優秀」(cum laude)、3.6 で「きわめて優秀」(magna cum laude)、3.8 で「最優秀」(summa cum laude) である。またワシントン大学は、成績優秀な学生に対して、毎年3種類のメダルを用意している。1・2年次の成績が最も優秀であった3年生に送られる「二年生メダル」(Sophomore Medal) と、1・2・3年次の成績が最も優秀であった4年生に送られる「三年生メダル」(Junior Medal)、そして卒業までの成績が最も優秀であった卒業生に与えられる「学長メダル」(President's Medal) である。
- 8) *Barron's Guide to the Most Prestigious Colleges*, p. 27, p. 289.